

---

# 星空の地図

蒼山れい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星空の地図

### 【Nコード】

N0430V

### 【作者名】

蒼山れい

### 【あらすじ】

『TIGER&BUNNY』二次創作短編集。ヒーローズ中心、虎兎コンビと年少四人組覇頂。華やかなショーの舞台裏で綴られる、甘酸っぱくほろ苦い戦士たちの日常。【不定期更新】

**T h e s u n a l s o r i s e . (前書き)**

バーナビーと虎徹。 13話その後。

すっかり左脇腹の傷口が開いてしまった虎徹は、救急車で病院に送り返されることになった。

けろりとした顔で相棒に肩を貸していたバーナビーも、実際には全身のあちこちに決して軽くはないダメージを負っており、ふたり揃って搬送される始末だった。「あんたたちって、ホントにお馬鹿コンビねえ」とファイヤーエンブレムから二度目の苦言を呈されるのも仕方がない。

簡単な応急処置を受け、ふたりのヒーローは救急車のサイレンを聞きながら決戦の舞台をあとにした。虎徹はストレッチャーに寝かせられ、アンダースーツ姿になったバーナビーはサイドの座席に腰かけている。

「それにしてもハンドレットパワーで無理やり治癒力を高めるだなんて……本当にあなたは力任せというか、無茶な真似ばかりして」  
一時はICUで生死の境をさまよっていた虎徹が（完全ではないにせよ）劇的に回復した理由を問いただしたバーナビーは、深々とため息をついた。

浅黒い上半身の至るところに包帯を巻かれた虎徹は、「ハハハ」と乾いた笑いを洩らした。

「まあ確かに火事場の馬鹿力つつうか、裏技どころか反則モンな使い方なんだけどな。加減を間違えると体力まですっからかんになるし、治せる度合いも表面的な部分までだし」

「当たり前ですよ！ ヒーリング系の能力ならまだしも、僕たちの能力はあくまで身体能力の強化なんですから畑違いにも程がありません」

眼鏡をかけていないためにはつきりとしなない視界のなか、それでも虎徹が困ったような苦笑を浮かべていることは手に取るようになった。マスクの奥で、深い琥珀色の瞳がやわらかく自分を見つめ

ているだろうことも。

バーナビーは唇を噛みしめ、ふいつと顔を逸らした。

「……本当に、あなたってという人は」

「ここぞというときに実力を発揮する男だからな、俺は！」

「そういうことは裁判所のお世話にならないようになってから言うてください」

「手っ敵しいなー、バニーちゃんは」

おじさん泣いちゃうー、などとふざけたことを口にしながら、虎徹の声は楽しそうに弾んでいた。その理由をいやというほど実感し、バーナビーは耳が焼け落ちるような錯覚を抱いた。

こんなにも子どもっぽいくせに、倒れかけた自分を支えてくれた掌は大きく力強く、記憶の向こうの父のそれとよく似ていた。

おまえが信じてくれるって信じてたと告げられた瞬間、心底敵わないと思いつた。どんなに嫌みを並べ立てて遠ざけようとしても、彼はあっさりとバリケードを乗り越え、膝を抱えて縮こまっている少年の傍らにそっとやってくるのだ。

（大丈夫だよ）

（もうおまえはひとりぼっちじゃない。ひとりで戦わなくていいんだ）

（俺がいる。みんながいる）

（ここにいますよ。おまえの隣に、一緒にいるから）

小さな金色の頭を撫でながら、優しくささやく声が聞こえるようだった。

「……どうして」

バーナビーは堪えきれず、深く俯いた。

「どうしてあなたは、そんなにおせっかいなんですか」

「なんでだろうなあ」

答える虎徹の口調は、どこまでも明るく穏やかだった。

「きつと性分だな。バーニーちゃんが素直じゃないみたいにな、持って生まれちゃったモンなんだろうさ」

「こんなかわいくない後輩、見限ろうとは思わなかったんですか」「見限られるはずだったのは俺のほうだろ。やっと貰えたおまえの信頼を、そのおせっかいで裏切っちゃまったんだから」

だがそれは、きつと虎徹なりにバーナビーを思いやった結果なのだ。こうして彼の隣に戻ってきて、ようやく理解できた。

自分は、こんなにも満たされていたことを。

「本当に、ありがとな。俺を信じてくれて」

「……………相棒なら」

ああ、情けないほど声が震えている。曖昧な視界が熱に滲んでいっそうぼやけてしまう。

それでもバーナビーは顔を上げ、まっすぐ虎徹と向き合った。

「相棒なら、信じなくてどうするんですか」

虚を衝かれたように息を呑む気配がした。瞬くたびにこぼれそうになる涙を拭い、バーナビーは淡く微笑んだ。

「あなたがおせっかいな理由だって同じでしょう？ 虎徹さん」

「……………ああ、そうだな」

虎徹は、力が抜けたように笑った。

「おまえは俺の自慢の相棒だよ、バーナビー」

ふわり、と節くれ立った指が髪に触れた。やわらかく頭を撫ぜる掌の重みに、バーナビーは翠色の瞳を見開いた。

「おまえの相棒になれたことを誇りに思う。……………よくがんばったな」そのとき、彼は闇の中を走り続けてきたような二十年が終わったことを知った。

ふつりと糸が切れたように涙が溢れ出す。胸の奥から、喉の奥から、熱の塊のような感情の渦がこみ上げてくる。唇を震わせ、バーナビーは顔を両手で覆った。

それは歓喜だった。孤独と絶望と戦い続けた日々が無駄ではなかったということが。その果てに、両手を広げてすべてを受け止めて

くれるだれかがいたことが。

どうしようもないほどに、嬉しかった。

幼い頃に戻ったように泣くバーナビーへ、虎徹は何も言わなかった。静かに寄り添って、二十年分の涙がこぼれきるまでずっと頭を撫でていた。それだけで充分だった。

車窓の向こうへ目をやれば、ヒーローたちが守り抜いたシュテルンビルトの街並を朝陽が黄金に染めていた。

長い長い夜が明ける。

小ネタ とらさんとしんきさん？ (前書き)

虎徹とバーナビーによる小ネタ。会話文のみ。



小ネタ とらさんとつさぎさん？

【ケチャラー疑惑】

「どもっ！ タイガー&バニーのマヨラーなほう、虎徹です！」

「すっかり使い古されたネタですよ、おじさん」

「俺がマヨラーならバニーちゃんはケチャラーだよな！」

「どうしていきなりそうなるんですか！？」

「えっ、だってバニーちゃんは赤が好き」ケチャラーっていう伏線  
だろ？」

「……あなたの味覚を判断基準にしないでください」

【斎藤さんの陰謀？（14話ネタ）】

「ハイ！ タイガー&バニーの最近ハンバーガーを潰して食べる  
と意外とおいしいことに気づいたほう、バーナビーです」

「バニーちゃんが豹変しすぎておじさんちよっと怖いんですけど…

…」

「いやだなあ、虎徹さんつてば。僕はただ、あなたが優しくとて  
も素敵な人だつてわかつただけですよ？」

「お願いだからそんなキラキラした目で見ないで！ 信頼に溢れた  
無垢なまなざしを向けないで！ 三十路も下り坂のおじさんにはい  
ろいろつらいから！」

「ふふっ。そんなことを言って、あなたほど心のきれいな人はいな  
いのに」

「斎藤さあああんっ、バニーちゃんに何盛りやがったあああっ！？」

【心はまだ『お兄さん』】

「どもっ！ タイガー&バニーの最近間接照明の意味を教えてくださいましたほう、虎徹です！」

「そういうものにこだわらないところは虎徹さんらしいですけどね……」

「だっておじさん、暗いとこだと新聞の文字が読めないんだもん」

「僕が悲しくなるからそんなことを言わないでください」

「なあなあバニーちゃん。久しぶりに帰省して愛娘と一緒に寝ようとしたら『お父さんくさいからイヤ！』って言われたんだけど、それってどう思う？」

「本当にすみませんでした！ もう二度と中年ネタでいじったりしませんから！」

Gather roses while you may. (前書き)

年少四人組。ヒーローだって青春して何が悪い。  
イワン パオリン風味。

Gather roses while you may .

いつたいなぜこんなことに。

キラキラと輝くラメでデコレーションされたタンバリンを適当に叩きながら、バーナビーは思わず遠い目になった。

カラオケボックスの狭い個室には、古い日本アニメの主題歌が大音量で流れていた。アップテンポなメロディに乗って暑苦しい歌詞を力の限り歌い上げているのは、当然のごとく自他ともに日本オタクと認めるイワンである。我が身の一部といわんばかりにマイクを握り締め、激しく汗を散らして歌う姿から普段の俯きがちな青年をだれが想像できよう。

その隣では、最年少のパオリンが注文した山盛りのフライドポテトやら唐揚げやらを怒濤のように平らげていた。ほっぺたいっぱい頬張つてもぐもくと口を動かしている様は、ハムスターや栗鼠を連想させる。あの小さな体のどこに成人男性の平均を軽く上回る食事量が消えていくのか、今でも不思議でしようがない。

パオリンは忙しくなく食事に勤しみながらも、時折思い出したように「折紙さんカッコいいー！」とはしゃいだ声援を送っている。そのたびにイワンの歌声が一オクターブ跳ね上がり、若いつていいなあと最年長の二十四歳はしみじみと思った。

「ちよつと、そのつまんなそうな顔やめてくれない？ こつちまでテンション下がるんだけど」

不意に突き刺さった嫌みに、バーナビーはちらりと隣を見た。

眉根を寄せて睨んでくるのは、歌本を膝の上に広げたカーリーナだった。今日は午前中だけハイスクールの授業があったらしく、見慣れない制服姿である。

「別につまらないなんて思っていますよ。ただ『帰りたいなあ』と」

「あんだねえ……！ いつたいだれのためにわざわざ休みを潰して

つき合つてあげてると思つてるのよ!？」

細い眉を吊り上げるカーリーナに、バーナビーは肩を竦めてみせた。「僕はひと言も『カラオケに行きたい』なんて言っていないよ。ただ『カラオケに行ったことがない』と言っただけで」

「だからあたしたちが誘つてあげたんじゃない!」

どうやら彼女は、自分たちなりの『親切』にバーナビーが感謝していないことが気に入らないらしい。これだからわがままな女王様は困つたものだ、と、バーナビーは小さくため息をついた。

事の発端は、トレーニングルームでの些細な会話だった。

休憩中のカーリーナとパオリンが、ブルーローズの新曲の話からはじまつてカラオケでどんな曲を歌うのかということ盛り上がっていた。近くで瞑想していたイワンもいつの間にか加わり、賑やかなことだとトレーニングを終えたバーナビーが通り過ぎようとしたところへ、パオリンから思わぬ質問のボールが飛んできたのだ。

「バーナビーさんはどんな歌を歌うの?」

カラオケというものは知っている。しかし、それを経験したことは一度もなかった。

特に隠すつもりもなく正直に答えると、三人は沈黙し、きれいに揃つて「えええ　っ!？」と驚愕の悲鳴を上げた。あのときのバーナビーを見る目は、信じられないものというよりも理解できない別の生物を凝視するようなそれだった。

現役女子高生であるカーリーナはもちろん、パオリンやイワンも遊びといえばカラオケやゲームセンターが定番らしい。およそ人並といえるような十代を送つてこなかったバーナビーにはなじみのない常識である。

バーナビーにとって音楽は鑑賞するもので、好んで聴くのももっぱら古典的なクラシックばかりだ。流行りのポップスもアニメソングも、耳障りで品のない雑音のようにしか感じたことがない。

とうに二十歳を通り越した今ではすでに瑣末な過去だが、年下の先輩たち(特に女子ふたり)には我慢ならなかったらしい。バーナ

ビーの意見などきれいさっぱり無視され、こうしてカラオケボックスに連行された次第である。

アニメの主人公になりきったイワンが締めめの台詞を決め、パオリの拍手が元気よく上がった。カリーナとバーナビーもそれに続くのと、たちまちイワンの白い顔が爆発したように真っ赤になった。

「折紙つてば、意外とうまいじゃない」

「すごいすごい！ ホントに歌手みたいだったよ！」

「そそそんな、めめめ滅相もないでござる……！」

少女たちの賞賛にすっかり口調が折紙サイクロンになっている。

よっぽど恥ずかしいんだろ？なあと、バーナビーはちょっと気の毒に思った。

続いてはじまったのは、男性アイドルグループの人気ナンバーだった。「あつ、ボクだ！」とパオリンが慌ててマイクを手取る。

少年の甘酸っぱい片想いを綴った歌詞を、パオリンは少しはにかみながら歌っていく。うつつすらと頬に赤みが残っているイワンが彼女に見とれているのは明白で、カリーナはリズムに合わせて手拍子を取りながらにんまりとふたりを見守っていた。

「……僕のためというより、折紙先輩のためだったんじゃないんですか？」

「まあ、そうでもないとは言わないけど。折紙つてばキッドの前でもじもじするばかりで、コンビニにお昼を買いに行くのも誘えないんだもん」

見てることちがもどかしいわよ、とカリーナはふつくらとした唇を突き出した。

「だからこうやって、たまにさりげなくチャンスを作ってあげるの。キッドはあんな調子だからぜんぜん気づいてないけどね」

「優しいんですね」

「……あんたに褒められても嫌みにしか聞こえないのはなんでかしら？」

胡乱げな榛色の瞳に、バーナビーは「他意はないですよ」と苦笑

をこめて答えた。

「ただ、それなら尚更僕は必要ないんじゃないかと思って」

「あ、の、ねえ。何度言わせればわかるわけ？」

カリーナはずいっと身を乗り出すと、バーナビーの鼻先に人差し指を突きつけた。

「これはあんたのためでもあるんだから！ せっかくジェイクの事件が解決したつていうのに、あんたずーっと仕事ばかりじゃない。ちよつとは息抜きしないと倒れちゃうわよ」

思いがけない言葉に、バーナビーは目を瞬かせた。カリーナは居心地悪そうにそっぽを向く。

「……あんた、二十年もご両親の仇を追いかけてたんでしょ？ あたしにはぜんぜん想像できないけど、でも……大変だったつてことぐらいはわかるわよ」

バーナビーはそつと双眸を細めた。復讐心だけを糧に生きてきたこれまでの日々が脳裏に浮かんで消えていく。

屈託なく笑う同世代の子どもたちとすれ違うたび、言い様のない痛みが胸を焼いた。頬を染めて想いを打ち明けてきたクラスメイトの少女を、一緒に遊びに行かないかと肩を叩いた少年を完璧な作り笑いで拒絶したとき、覚えたのは憎悪にも似た苛立ちだった。

（僕にかまわないでくれ。僕の邪魔をしないでくれ。僕はきみたちと違う。僕にはそんなものはいらないんだ！）

その裏にあったのは、いつだって彼らを羨み、同じものになりたいと焦がれる憧憬だったのだと今ならわかる。

あんな風に自分も笑えたら、どんなに幸せだろう。

だれにもいえず蓋を閉めて押し隠してきた、幼い願い。こぼれ落ちたかけらを掬い上げるようなカリーナの声が、バーナビーの鼓膜を優しく震わせた。

「だけどこれからは、もつと肩の力を抜いてもいいんじゃない？」

ずっとかんばつてきたんだから、ご褒美を貰ったって文句は言われ  
ないわよ」

「……………そのご褒美がこれですか？」

「わ、悪かったわね！ そんなに気に入らなかつたらさっさと帰れ  
ばいいじゃないっ」

耳の先まで赤くして肩を怒らせているカーリーナに、バーナビーは  
小さく笑った。胸の奥にふわりとぬくもりが広がる。

ああ、なんだ。自分とはつくに幸せだったのではないか。

他愛ないおしゃべりも、馬鹿馬鹿しいお祭り騒ぎも、並んで歩い  
てくれる存在も 当たり前のようにそばにある。鬱陶しいとか面  
倒くさいとか言い訳しながら、それでも彼らから離れようとする  
自分が何よりの証拠だ。

「いいえ、嬉しいです」

カーリーナがびつくりした顔で振り向く。バーナビーはやわらかく  
微笑んだ。

それは年若い青年らしい、素直で、だからこそ美しいほど鮮やか  
な笑顔だった。

「誘ってくれてありがとうございます、先輩」

「……………ど、どういたしまして」

みるみるうちに茹で上がったカーリーナは、まるでイワンの性格が  
移ったように下を向いてぼしょぼしょと答えた。少女の態度に首を  
傾げながらも、バーナビーはいっそう笑みを深めた。

最後まで歌いきったパオリンに、イワンが惜しみない拍手を送っ  
ている。照れたように頭を掻いていたパオリンは、「次はバーナビ  
ーさんの番だよ！」とマイクを押しつけてきた。

「バーナビーさんだけぜんぜん歌ってないじゃん。ほらほら、早く  
入れて入れて！」

「僕、最近の曲にあんまり詳しくないんですよ。よかつたら先輩た  
ちが選んでくれませんか？」

「えっ、そうなの？ うーん、折紙さん何がいいと思うっ？」



「あつ、えつ、ええつと……せ、拙者はこのあたりが歌いやすいのではないかと」

パオリンとイワンは歌本を挟んで額を寄せ合い、真剣に悩んでいる。そこへなんとか復活したらしいカーリーナが「ハンサムにアニソンなんてシユールすぎるわよ」とツッコんでいた。

いったいどんな曲を歌わせられるのやらと、バーナビーは苦笑した。

青春とは、なんて楽しく愛しいものだろう。

**G o l d e n   s l u m b e r s   k i s s   y o u r   e y e s . (前書き)**

バーナビーと虎徹) + (。 23話幕間。

虎徹の顔色を見て真っ先に口を開いたのは、ベンだった。

「ジャステイスタワーに着くまで、まだ時間がかかるだろう。起こしてやるから横になつてろ」

「こんなときに……っ」

とっさに声を荒げかけた虎徹は、苦い表情で唇を噛んだ。十一年間ヒーローとして死線の上で戦ってきた彼には、『こんなとき』だからこそという意味が痛いほど理解できてしまうに違いない。数日間<sup>間</sup>に及ぶ逃亡生活に加え、つい先ほどまでバーナビーとの死闘で追い詰められていた身は、少しでも多くの休息を必要としている。だが最愛の娘を人質に取られた父親の心は、憤怒と焦燥に焼き切れそうになっているはずだ。

テーブルの上で震えている拳を、バーナビーはそつと片手で包みこんだ。危うい光を孕んだ琥珀色の瞳がすぎるように見つめてくる。「バーニー……」

「休みましよう、虎徹さん。あなたのダメージは決して浅くない。楓ちゃんを取り戻すために、今は傷を癒すべきです」

そこまで言葉にして、目の前の相棒を本気で手にかけてようとしていた記憶がまざまざと甦り、バーナビーは耐えきれずに目を伏せた。重ねた手にか弱い力がこもる。

「お願いします 虎徹さん」

わずかな沈黙のあと、微かなため息が聞こえた。バーナビーの掌の内側で張り詰めていた拳がそつとほどかれる。

「……わかったよ」

くしゃりと前髪を潰され、いつの間にか俯けていた視線を引つ張り上げられる。憔悴が滲む顔に、虎徹は場違いなほど優しい苦笑を乗せていた。

「そんな表情かおでお願いされちゃったら、おじさん困っちゃうんだけ

ど」

「……変な言い方しないでください」

不意に泣きたくなるような腹立たしさがこみ上げてきて、バーナビーは精いっぱい強がりでごまかした。

それは、身を切られるような苦境でさえ他人を思いやる彼の心根に対するものであり、それ以上に結局は甘やかされる立場でしかない自分自身へのものであった。相棒と言われながら、いつだってバーナビーは虎徹に背負われてばかりなのだ。

《それじゃあ私たちは移動しよう。バーナビー、きみも一緒に……》  
来るかい、と続くはずだったのであろう斉藤のスピーカー越しの  
声は、途中で切れた。

斉藤たちが続いてソファから立ち上がるうとしたバーナビーの膝の上へ、虎徹がごろりと横になったのである。当然のようにソファへ押し戻され、バーナビーは目を白黒させた。

「ちょ、虎徹さん!？」

虎徹はしばらくもぞもぞと身じろいでいたが、寝心地のいい位置を確保するとすっかり瞼を下ろしてしまった。何度呼びかけてもわざとらしく「んー」と返事にもならない声を洩らすばかりだ。

三十路も下り坂の男がするにはあまりに子どもじみていて、かわいいたは言いがたい無言のわがままに、バーナビーは途方に暮れ、ベンは呆れきったため息をこぼし、斎藤は《キヒツ》と小さく笑った。

《タイガー直々のご指名とあればしょうがない。バーナビー、その図体だけは大きな子どもを頼んでもいいかな?》

「えっ、あの、でも」

《せっかくだから子守唄のひとつでも歌ってやればいい。虎の仔がひどく夜泣きしたって、私の施した防音設備は完璧だからね》

椰揄混じりの台詞に反するやわらかな口調に、バーナビーはハッと息を呑んだ。眼鏡の向こうのつぶらな黒い瞳が、「私たちは何も聞こえないし、聞かないよ」と微笑んでいるような気がした。

ここに残ることを求められているのが外でもない自分なのだと知って、バーナビーはすとんと腰を下ろした。

ベンは物言いたげな顔をしていたが、斎藤に促されるように待機スペースから出ていった。ドアの閉まる音が響き、奇妙な沈黙が肩に押ししかかってきた。

「……………男の膝枕なんて、堅くて寝心地が悪いんじゃないですか」  
ようやく絞り出した言葉は、なんとも間の抜けた指摘だった。

虎徹は喉を鳴らし、薄目を開けて見上げてくる。

「こんなおっさんを二回もお姫様抱っこしておいて、バーニちゃんがそれを言う？」

「僕はバーニじゃなくてバーナビーです」

「そうですねー。でも、今は『バーニ』って呼ばせて」

「こわいんだ、と吐息のような淡い呟きに、呼吸が止まるかと思っ  
た。

「……………怖い、って」

舌がもつれる。口の中に唾が溜まる一方で言葉が出てこない。煙  
のような、ひどく静かな虎徹のまなざしに心臓が震え上がる。

「都合のいい、夢なんじゃないかって。本当は、あのままおまえに  
殺されて……………楓も、あいつらも、おまえも、失っちまうんじゃない  
かって」

「そんな、ことッ」

「うん、ないな。だって俺ちゃんと生きてるし、バーニちゃんの膝  
ごっこつしててあんまり気持ちよくないし」

「今すぐ蹴り落としてあげましょうか」

氷の温度でささやくと、虎徹はくすぐったそうに笑った。その表  
情がいつになく幼く、まるで無邪気な少年のようですらあり、バー  
ナビーは毒気を抜かれた気分になった。

「……………ふざけていないで、早く寝てください。それとも、本当に子  
守唄をご所望ですか？」

戦闘で乱れたのだらう、アイマスクを外した目元に落ちる黒髪を

払ってやると、虎徹は猫のように双眸を細めた。

「おまえ、子守唄とか知ってんの？」

「うる覚えですが……母やサマンサおばさんがよく歌ってくれた記憶があります」

「あー、俺もあるわ。友恵もよく楓がちゅちゅ唄歌ってやってたっけなー。ああいうのってさ、いつまで経っても忘れられねえモンだよな」

ふっと浮かんだ笑みはひだまりのように穏やかで、だからこそ切なかつた。バーナビーはとっさに虎徹の目元を覆い隠した。

「おーい、バーニー？」

「……目を閉じて、眠ってください。大丈夫です、僕はちゃんとここにいます。きっとマーベリックを倒して、楓ちゃんやみんなを救い出すことができます」

虎徹さん、とまじないのように名前を呼ぶ。彼がつけた憎らしくも特別な愛称が自分を悪夢から引き戻してくれたように、ここは虎徹が確かに生き、描いてきた夢の先にある世界なのだと訴える。

子どものように泣き崩れた自分を虎徹は何度も支えてくれた。問い詰めたことも、殴ってやりたいことも、謝り倒したいこともたくさんある。だが今は、年上の相棒がはじめて見せた不器用な弱音を受け止めてやりたかつた。

(どうか、もう一度)

(一緒に立ち上がって、一緒に戦いましょう)

(これからも、あなたとともに在るために)

膝にかかる重みが増し、目元を覆う手をぎゅっと握りしめられる。虎徹は深く息を吸いこむと、震えそうな声で言った。

「……あのだ」

「はい」

「バーニーに、聞いてほしいことがあるんだ。たくさん話したいこと

があるんだ。全部終わったら……怒ってもいいから、俺の話を聞いてくれねえか」

「はい」

バーナビーは微笑んで頷いた。

「聞かせてください。ふたりでたくさん話して、喧嘩して、仲直りしましょう」

「はは……そーだな……」

重ねた掌をしつとりと濡らす熱を感じたが、バーナビーは何も言わなかった。

やがて、か細い寝息が聞こえてくるまでにそう時間はかからなかった。

\*\*\*

「……驚いた」

ぼつりと落ちた呟きに、ハンドルを握る斎藤は助手席に一瞥だけを投げた。

かつてのワイルドタイガーの上司だったという男は、ぼんやりとした顔で車窓の向こうを流れていく街並を見つめていた。

「あいつが、あんな風に他人に甘えるなんて」

《タイガーのことかい？》

「ああ……。虎徹はだれとでもすぐに打ち解けられるように見えて、最後の一步を踏みこませないところがあるからな。根が一匹狼というか……本音をさらけ出そうとできない臆病者というか」

《確かに》

ベンは長いため息を洩らすと、シートに深々ともたれかかった。

「あいつのかみさんが死んでから、ますます内に引きこもるようになってなあ……俺や、親友のロックバイソンにも無理や無茶をするなど言わせてくれなかった。だから正直、新人とコンビを組まされるって聞いても虎徹の負担になるしかないと思ってた」

彼の口元にゆるゆると綻び、力が抜けたように微笑んだ。

「だけど、余計な心配だったみたいだな。……あいつは、いい相棒を持っただよ」

《……私から見れば、タイガーもずいぶんバーナビーに甘えているように思えるけどね。足りないところを補い合って、ふたりでちょうどいいバランスを取っているんじゃないかな》

ちくはぐなようできて、いざというときには空おそろしいほど噛み合うヒーローコンビ。こんなどん底の状況ですら、彼らなら絶望に傾いた天秤をひっくり返してくれると根拠もなく信じてしまう。

最後にふたりが心から笑ってくれるように、斎藤は斎藤にできる戦いを全うするのみだ。

きっと束の間の眠りにまどろんでいるに違いない戦士たちの瞼の上に、勝利の女神のキスがあらんことを。

柄にもない祈りを天に捧げ、斎藤は力いっぱいアクセルを踏みこんだ。



Think the sun shines out of somebody

年少四人組。年齡逆轉疑似兄妹關係。

シュテルンビルトを守る八人のヒーローのなかで最も年若いのは、ドラゴンキッドことホアン・パオリンである。

その次にカリーナ、イワン、そして前シーズンに入ったばかりのバーナビーと続く。まだ十代、二十代前半である彼らは、人間としてもヒーローとしても経験を積んだ年長者たちからライバルや同僚という以前に、幼い弟妹や、ときには我が子のような存在として扱われることが間々あった。その筆頭が虎徹やキースで、アントニオはスポンサー経由の割引券を使って焼肉を奢ってくれたり、ネイサンは何かと年頃の少女たちの相談に適切な助言をくれる。

こうした年上の仲間たちの態度は、鬱陶しいとか腹立たしいとか感じるときもあるが、面映ゆく胸に染み入るような心地よさを覚えるほうが多かった。年端も行かない若者でありながら常に市民の望むヒーローたれと強いられるカリーナたちにとって、両手を広げて甘やかしてくれる大人ほど貴重な存在はいないからだ。

しかし、ここ最近の年少組には微妙な変化が起きていた。

正確には、バーナビーを除く三人に。

「ねえねえ、バーナビーさんは何が食べたい？」

滴る汗を拭いながらランニングマシンから下りたバーナビーを、満面の笑みを浮かべたパオリンが待ちかまえていた。

「……はい？」

ぱちりと緑眼を瞬かせるバーナビーに、パオリンは「じゃーん！」と両手に持っていたものを広げてみせた。ジャスティスタワーの近くにオープンしたデリバリーピザのチラシである。

「今日トレーニングはじめるの遅かったでしょ？ もう晩ご飯の時間だし、せっかくだから残ったみんなでピザでも取らないかって折紙さんからお誘いがあったの！」

「ここで、ですか？」

「学校の『ガツシユク』みたいで楽しそうだよね！」

パオリンはにこにこ上機嫌にずれた応えを返している。困惑を滲ませたバーナビーは、ベンチに座って様子を窺っていたカリーナとイワンを見やった。

「いいんですか、勝手に持ちこみとかして」

「結構みんなやってますよ。さすがに夕飯ははじめてたけど……大丈夫じゃないかな？」

「そんな曖昧な……」

小首を傾げるイワンに、バーナビーはこめかみを押さえた。真面目というよりも細かいところを気にしすぎるスーパールーキーに、カリーナはわざとらしく肩を竦めてみせた。

「こんなことぐらいで怒るやつなんていないわよ。後片づけさえきちんとすれば大丈夫でしょ」

カリーナはベンチを離れてふたりに近づくと、パオリンの後ろからバーナビーをじりと睨み上げた。自分よりずっと年上の青年は、しかし未知の体験に戸惑う子どものような顔をしていた。近頃、よく目にする表情だ。

こんなとき、決まってカリーナの心に生まれるのは、むず痒いような、優越感に似ているようでもっとやわらかな感情だった。それは日に日に大きくなって、飼いたての仔犬のようにバーナビーをかまい倒したくて仕方なくなる。

どうやら、それはパオリンやイワンも同じらしい。前者はあからさまにバーナビーの世話を焼きたがるようになり、後者はさりげなく話しかける頻度が増えた。カリーナ自身、この世渡り上手なようで実はとんでもなく人づき合いが下手な後輩をついつい気にかけてしまう。……口喧嘩で終わってしまう確率がかなり高いが。

「タイガーが言ってたけど、あんたこの手のものってあんまり食べないんだって？」

「はい？」

「この間、『バーニ』は買い食いにつき合ってくれないからつまんな

い』って愚痴ってたわよ」

「……………あのおじさんめ」

バーナビーは小さく舌打ちした。ジエイク戦以来、相棒に対して懐いたように見える彼だが、まだ『虎徹さん』という素直な呼び方に慣れないらしい。

三人揃ってじいっと見つめると、彼は決まりが悪そうに湿った前髪を掻き上げた。

「……………ファーストフードって苦手なんですよ。今まであまり食べる機会がなくて、おいしそうなイメージがないんです」

「何よ、ただの食わず嫌い？」

あつきれたとカーリーナが呟くと、ぷいっとそっぱを向いてしまう。パオリンはカーリーナの腕の中でぴよんぴよん飛び跳ねた。

「じゃあこれがバーナビーさんの『ハツタイケン』なんだね！」

「ちょ、キッド！？ 言葉選びが間違ってるから！」

なんともしどい発言にカーリーナは慌て、イワンは真っ赤になって噴き出し、バーナビーはぽかんと口を開けた。

「え？ 生まれてはじめてのことを『ハツタ……………』」

「キキキ、キッドさん！ ここはファーストフード初心者ってしましょう！ お願いですから！」

「折紙ナイス！ そうよキッド、ハンサムはファーストフード初心者なんだから先輩のあたしたちが教えてあげなくちゃ！ ほらほら、おすすめのピザはなんだっけ？」

必死にまくし立てるカーリーナとイワンに疑問符を浮かべながらも、パオリンは嬉々としてとメニューの説明をはじめた。

ホッと胸を撫で下ろしたカーリーナの耳に、「……………ぶっ」と風船の空気が抜けるような声が届いた。

見ると、片手で顔を覆ったバーナビーがぶるぶると肩を震わせている。え、と目を丸めた次の瞬間、トレーニングルーム中に響き渡るような笑い声が弾けた。

カーリーナは絶句した。パオリンとイワンも動きを止め、呆けたよ

うにバーナビーを凝視している。彼は腹を抱えて体を折り曲げ、げらげらと声を上げて笑い転げていた。

「ハ、ハンサム……？」

止まる気配のない爆笑にだんだん恐怖を感じ、カリーナはおそろおそろ声をかけた。バーナビーはひいひい言いながら笑い声を収めると、眼鏡の奥にうつすら滲んだ涙を拭った。その仕種がまた衝撃的だった。

「す、すみません……あなたたちのやりとりがまるでコントを見ているようで……ああ、お腹が痛い」

「そりゃ、あれだけ全力で笑い続ければ痛くなるわよね……」

いつもの口調だったら馬鹿にしているようにしか思えない台詞も、いっそ潔いほど豪快に笑われてしまえば「はあ、そうですか」と言うしかない。よほどツボにハマったのか、バーナビーの顔は見慣れた作り笑いが嘘のようにゆるみきつっている。

「……バーナビーさんが声出して笑ってるの、はじめて見たかも」  
パオリンがぼつりと呟いた。言葉にならない様子でイワンがこくこくと頷いてみせると、バーナビーははたと我に返ったように凍りついた。

シュテルンビルトで最も美しいと称えられる花貌がみるみるうちに茹で上がる。

「……っ、……！」

バーナビーは首に巻いたタオルに顔を伏せた。しかし、金髪から覗く形のいい耳の先から首筋まで鮮やかに染まっているのはあらわで、ほとんど意味を成していない。

反則だ。なんなのこのアホな生きものは！ とカリーナは内心で絶叫した。

「バーナビーさんかーわいいー！」

羞恥に打ち震えるバーナビーへ、パオリンが無邪気にとどめを刺す。輝く両目を見る限り真っ白な贅辞なのだろうが、カリーナにはバーナビーの声にならない悲鳴が聞こえるようだった。

「やっぱりバーナビーさんってかわいいよね！」

「ねー！ と笑って同意を求めてくるパオリンに、カリーナとイワンは生ぬるい微笑で応えた。

クールで皮肉屋でとっつきにくい有能新人は、蓋を開けてみると呆れるほど箱入り育ちの子どもっぽいわらわらだった。ごく普通の少女少女が経験するような物事を知らず、「プリクラと証明写真の違いってなんですか？」と真顔で尋ねるほどである。

その裏には、片手にも満たない年齢でありふれた幸福を奪われ、許された優しさを切り捨てて生きてきた時間があるのだと知っているからこそ、放っておけるはずがなかった。

硬質なガラスの壁の向こうで、さみしいと、悲しいと口にするにとすら教えてもらえないままずっとまっている少年に、だれからともなく手を伸ばしていた。

(ほら、こっちにおいで)

(あたしたちと一緒にいこう)

(一緒に遊びにいこう。おいしいご飯を食べたり、くだらないおしゃべりをしようよ)

(たくさんたくさん傷ついて、がんばって、だからもう、あとは笑うだけだから)

いつしか壁は崩れ、怖々と伸ばされた小さな手は、バーナビーの心そのもののようにやわらかかった。

ほろりとこぼれる幼い笑顔がもつと見たいと思う。未来と幸せはいくらでも作っていけるのだと考えるのは傲慢で背伸びかもしれないけれど、それは、守られるばかりだった若いヒーローたちに芽吹いた確かな慈しみだった。

「あっ、かわいいって……二十四の男につける言葉じゃないでしょう」

「えー、だってホントのことだもん」

なんとか復活したらしいバーナビーの反論に、パオリンがぷくつと頬を膨らませた。そこをちょんちょんとつつき、カリーナはにんまりと笑ってみせた。

「いいのよ、だってあたしたちのほうが先輩でお姉さんだもんねー」

「そうだよな！　じゃあ折紙さんはお兄さんだ！」

「ええ！？　バーナビーさんのお兄さんなんて、あ、あんまりにもおそれ多いかと……」

泡を食うイワンにふたりの少女がきゃらきゃらと笑い声を転がすと、バーナビーはふてくされた顔でむつつりと押し黙った。だが、頬に残る赤みが不器用な感情を何より物語っている。

こういうところがかわいって言われちゃうのよ、とカリーナは意地悪く微笑んだ。

楽しい時間はまだまだはじまったばかりだ。

## 01 (前書き)

もしもブルーローズがヒーローではなく一般人だったら、というパロディ。原作における時間軸で八話あたり。

バーナビーと虎徹とカリーナで三角関係風味。



その噂をバーナビーの耳に吹きこんだのは、最近ようやく息が合ってきた年上の相棒だった。

「バーニーちゃん、『ブルーローズ』って知ってる？」

事件の乱発によってスケジュールが大幅に狂い、深夜のオフィスに缶詰状態になりながら残業をこなす羽目になった。デスクで雪崩を起こしている書類の山を片づけることに飽きたらしい虎徹が不意に身を乗り出してくる。

いつもだったら「知りませんよ。そんなことより一枚でもその目の前の山脈の標高を低くしてください」という嫌みで切って捨てるところだが、パソコンの画面との睨み合いに両目が悲鳴を上げていたバーナビーは、眼鏡を外して目頭を揉みながら素直に答えた。

「いいえ……新種のワインの銘柄ですか？」

「ぶつぶー。だけど酒関係ってのはいいとこ突いてんな」

常日頃からバーナビーのつれなさを嘆いている虎徹は、思わぬ反応のよさに瞳を輝かせた。それは虎というよりも人懐っこい仔猫がごろごろと喉を鳴らしている姿そのもので、まったくおじさんのくせにかわいいつてどうということだとバーナビーはだれにでもいいから愚痴りたくなった。

「アントンから聞いたんだけどな、シルバーステージのどっかにあるバーですんげえ美女が歌ってるんだとよ。だけど決まった日にいっつもいるわけじゃなくてさ、月に二回くらいしかステージに上がらなくて、たまたまその娘こがいる夜に行けたらラッキーなんだって」

アントンとは、ふたりの同僚であり競争相手でもあるクロノスフーズ所属のヒーロー・ロックバイソンのことだ。高校時代からの親友だという虎徹は、たまに彼のことを少年の頃のように愛称で呼んでみせる。ヒーローのなかで虎徹のことをファーストネームと呼ぶのもアントンオオだけで、その特別な関係がバーナビーにはどこかま

ぶしく、切なかった。

「彼女が『ブルーローズ』という名前なんですか？」

ちりちりと焦げるような胸の痛みを無視し、バーナビーは尋ねた。もちろん源氏名だろうが、それにしても奇跡の薔薇とは大した名前だ。

「そつ、なんでも名前に負けねえぐらいの歌い手らしいぜ。ファイヤーエンブレムの知り合いが聞いたことがあるみたいんだけど、なんでプロの歌手じゃないのか不思議なくらいだつてべた褒めしてたな」

「へえ……それが本当ならよほど向上心のない女性なのか、それとも何か事情があつてバーのステージで甘んじているんですかね」

「バニーちゃん、あいかわらずきつついな」

器用に椅子の上で胡坐をかき、更にそこへ頬杖をついた虎徹はしよっぱい苦笑をこぼした。バーナビーは眼鏡をかけ直すと、「正直な感想を述べただけですよ」と肩を竦めた。

「それで、その歌姫がどうかしたんですか？」

「そつ、れつ、がつ！　なんとファイヤーエンブレムが例の知り合いを掻き口説いてバーの場所を聞き出したんだつてよ。しかも今月はまだ一回しか歌つてないから、今日の夜は間違いなくステージに上がるつてさ」

ちらりとデスクトップの隅の時計を見ると、数分前に日付が変わつたばかりだった。あと一日経てば今月も終わりだ。

「なるほど。奇跡の歌声を拝聴できるまたとないチャンスというわけですか」

「そーゆーこと。んで、昨日が昨日だったから今日はヒーロー全員オフ間違いなしだろ？　そこに姐さんからのありがたいーいお誘いが来たつてわけ」

どう？　と虎徹は得意げな顔で見つめてくる。バーナビーはゆっくりと瞬いた。

「……僕もご一緒していいんですか？」

すると、なぜか虎徹は驚いたように目を丸くした。

「えっ、バニーちゃん行かないつもりなの？」

「いえ……てつきり自慢話をされているのかと」

「おまえのなかで俺ってどんだけひどい先輩なの!？」

心から傷ついた様子のツツコミに、思わず「すみません」と謝ってしまふ。虎徹はがしがしと頭を搔くと、苦いものを噛んだようなしかめっ面で言った。

「あのなあ、いくらかわいげがないつつつても後輩いじめするほど俺は落ちぶれちゃいねえぞ」

「かわいげがなくてすみません」

「だっ! そういうところがかわいくねえって……あーもーっ、とかくおまえもつき合えよ! 先輩命令だからな!」

虎徹は一方的にまくし立てると、「終わりだ終わり! さっさと仕事片づけるぞ!」とデスクに向き直ってしまった。

バーナビーはもう一度睫毛を上下させ、ようやく状況を把握すると 堪えきれずに赤面した。

……どうやら、自分は相棒や同僚たちと呑みに行こうと誘われたらしい。というか、ついていくことが決定事項になっている。

途端にむず痒いような、けれどももひどくやわらかい熱がこみ上げてきて、バーナビーは逃げるようにパソコンへ視線を戻した。なんだこれ、すごく恥ずかしい。

「………了解しました、先輩」

蚊の鳴くような声で返事をするのが精いっぱいだった。

白々と都市の夜が明けるまで、オフィスには奇妙に甘酸っぱい緊張感に満ちた沈黙が落ちていた。

そのバーは、細い路地の奥にひっそりとあった。

店名を示す看板はなく、落ち着いた飴色のドアにかけられた『Open』のプレートだけが訪れる者を歓迎していた。カウベルを鳴らしながらドアを開けると、懐かしいジャズのナンバーがゆったりと流れてくる。この手の酒場にはよくあるように店内の光源はぎりぎりまで減らされ、オレンジ色の間接照明がやわらかな陰影を作り出していた。

「いらつしゃいませ」

カウンターの向こうからバーテンダーが穏やかな声で出迎えてくれる。真つ先にドアをくぐったファイヤーエンプレムことネイサン・シーモアは、いかにも慣れた様子で「四人だけど、いいかしら？」と尋ねた。

「それでは、奥のテーブルへどうぞ」

「ありがとう。さ、ついていらつしゃいあなたたち」

マスカラをたっぷり乗せた睫毛でウインクを返し、ネイサンは背後の同僚たちを店内へ促した。

まるで常連客のような足取りで歩き出した彼女（本来ならば彼と表現するべきところだが、ネイサンのことを尊重するならば彼女と呼ぶほうがふさわしいだろう）のあとを、アントニオと虎徹、そしてバーナビーがぞろぞろとついていく。今回、ネイサンの誘いを受けたのはこの三人だけだった。

スカイハイことキース・グッドマンは毎夜行っている自主パトロールを理由に申し訳なさそうに辞退し、折紙サイクロンことイワン・カレリンは真つ赤になりながら最年少のドラゴンキットと中華料理を食べにくい約束をしているのだと打ち明けた。彼の片想いを知る年長者たちはすべてを心得た顔で頷き、若者の肩を叩いてその健闘を祈った。ちなみにドラゴンキットことホアン・パオリンはまだ未

成年であるため、最初からメンバーには数えられていない。

カウンター席を通り過ぎると円を描くように空間が広がっていた。四人がけのテーブル席がいくつか散らばり、最奥のステージにはまだだれの姿もない。中央に置かれたグランドピアノがスポットライトの光を艶やかに弾いているばかりだ。

四人が席に就くと、見計らったようにボーイがオーダーを取りにきた。それぞれ好みの酒と軽いつまみを頼み、ついでに噂の歌姫がいつ頃お出ましになるのかを確認する。

若いながらも品のよさそうなボーイは、あと三十分ほどで彼女のステージが始まると教えてくれた。

「やっぱり今日は当たりだったみたいね」

満足そうに微笑むネイサンに、「しかしなあ」とアントニオが厳しい顔をしかめる。

「こんな噂になるくらいの歌手だったら、月に二回程度といわずに毎晩ステージに立つてもいいんじゃないか？ そのほうが店も儲かるだろうし」

「そこなだけどね」

美しく整えた長い爪でぴつとアントニオを指差し、ネイサンは双眸を細めた。

「どうも聞いた話じゃ、ブルーローズはまだ若い女の子らしいのよ」「そりゃー年食ったオネエサマより、ぴつちぴちのかわいいこちゃんのほうが見ても嬉しいんじゃないかね？」

いかにもオヤジ臭い茶々を入れる虎徹に呆れたような視線が突き刺さる。

「いくら『ぴつちぴち』でも、さすがに女子高生はまずいでしょ？」声をひそめてネイサンがささやいた言葉に、三人のヒーローの表情がさつと変わった。

「……マジかよ？」

「マジも大マジよ。結構大人っぽい顔立ちしてるみたいだけど、よく見るとティーンの子なんですって。十五か十六……よく

て十七歳ぐらしかしら。彼女のステージがあつた日に、シルバーステージでも有名なお嬢様学校の制服姿の女の子がこのあたりを歩いてたつて目撃情報もあるのよ」

シュテルンビルトでは未成年の夜間労働をある程度（たとえば、自分で学費を稼がなければならぬ苦学生などの場合だ）認めている。しかし昨今の犯罪発生率を鑑みれば、とうてい推奨されるべきではない。警察や各教育機関などから、未成年ひとりでの夜間外出を控えるよう何度も通達が行われているはずだ。

悲しいことに最下層のブロンズステージで年若い労働者は珍しくもないが、中流家庭が多く暮らすシルバーステージでは夜の街を少女がうろついでいればすぐに補導・保護される。もしも未成年だとわかつていて雇用すれば何らかのペナルティが課せられるだろう。

「つまり、ブルーローズが十代の少女だと知られないように敢えてステージの回数を減らしているの？」

バーナビーの指摘に、「だぶんね」とネイサンは頷いた。

「……そんな安い店には見えねえけどな」

虎徹が渋い表情で呟く。確かに、店の雰囲気はシルバーステージのなかでも上質なものと窺えるし、店内の客層もそれに見合った印象だ。

「アタシの知り合いもそこに首を傾げてたのよ。常連客だからマスターの人柄はよく知ってるし、そんな場末の酒場みたいなことをするはずなんかないってね」

「ブルーローズについては、なんと？」

「『企業秘密』ですって」

深まるばかりの疑問に、ヒーローたちは眉間に皺を寄せて黙りこむしかなかった。そうこうしているうちに注文した酒やつまみが届き、とりあえず気分を変えて乾杯しようということになった。

「えー、それでは……あー、なんだ、その……あっ！ そうそう、

我らが見切れ職人の恋の成就を祈って！ かんぱーい！」

イワンが聞いたら悲鳴を上げそうな虎徹の音頭に呆れたり苦笑したりしながら、それぞれの酒杯を掲げて軽く打ち合わせた。

ブルーローズのステージがはじまるまでの間、四人は世間話やら仕事の愚痴やらで盛り上がった。といっても、新参者のバーナビーはつき合いの長いらしい先輩たちの話に適切な相槌を打ったりすることしかできない。それでも思い出したように虎徹の失敗談にいきなり巻きこまれたり、絶妙なタイミングでネイサンに話題を振られたり、ふたりに振り回されるアントニオに苦労人としての同意を求められたりしているうちに、居心地の悪い疎外感徐徐に薄れていった。

注文したロゼワインをちびちびと舐めながら、いつも自宅のリビングでひとり呑んでいる上物より美味に感じるのはなぜだろうと、バーナビーは内心で首を傾げた。甘く芳醇な味わいは、隣で楽しそうに笑う虎徹を見ているうちにいつそう濃く深くなっていく。

虎徹とは、一度だけバーナビーの部屋で朝まで呑み明かしたことがある。あの日の目覚めはひどい二日酔いに襲われながら、なぜか笑いたくなるような快いものだった。あのときの、体の内側を隅々まで満たすあたたかな感情が、再びバーナビーのなかで生まれようとしていた。

やがてグラスの中のワインが半分まで減った頃、いっせいに蝋燭の火を吹き消したようにふっと店内の照明が落ちた。

わずかなBGMも話し声も消え、人々の視線が暗闇に白く照らし出されたステージに吸い寄せられる。スポットライトのまぶしさにバーナビーが目を細めると、そこにひとつの影が現れた。

(……想像していたよりも、ずいぶん小柄だ)

コツコツとヒールを鳴らしてピアノの前まで進み出たのは、ほっそりとした輪郭を持つ女性だった。肌の白さを際立たせるシックな黒いワンピースドレス。やわらかそうな淡いブラウンの髪に包まれた顔は小さく、確かにだれもが納得する端麗なものだった。どちらかというと可憐と表現したい顔立ちだが、ふっくらとした桜桃色の

唇が濡れたように光る様はどこか艶めかしい。

大きな榛色の瞳がまっすぐ客席を 睨む。まるでこれから勝負を挑むような強いまなざしで、人々を、バーナビーを射抜いた。

知らず、ごくりと喉が鳴った。

(なんとというか……これから歌を聞いてもらおうとする態度じゃないよな)

聞いてほしい、なんて生易しいものではない。鮮烈なまでの気迫が、あたしの歌を聞け、と命じていた。

歌姫は軽く一礼すると、椅子を引いてピアノの前に座った。鍵盤の上に白く細い指を乗せ、すつと息を吸いこむ。

そして、奇跡のステージが幕を開けた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0430v/>

---

星空の地図

2011年12月29日16時56分発行